

## 冠動脈CTにおけるHR別陽性的中率の検討

北野 琢也<sup>1</sup>

<sup>1</sup>舞鶴共済病院

【背景・目的】320列検出器MDCTは、検出器の多列化、空間分解能、時間分解能の向上によって、冠動脈CTの画質改善と診断能の向上に貢献している。冠動脈CTの陽性的中率について撮影時の心拍数と狭窄率との関係、および冠動脈を3枝に分類し後ろ向き研究を行った。【方法】2023年1月から2024年12月の期間で冠動脈CTとCAGを行った63例の連側データを経験年数9年の技師が狭窄率について測定した。有意狭窄率75%以上と判定した症例を(HR≤60, HR61～65, HR66～69, HR≥70)の4群に分類し、CAGをゴールデンスタンダードとして各心拍での陽性的中率および冠動脈3枝ごとの陽性的中率を求めた。

【結果】有意狭窄率75%以上の陽性的中率はHR≤60:90%, HR61～65:79%, HR66～69:80%, HR≥70:58%。冠動脈3枝ではRCA(HR≤60:83%, HR61～65:100%, HR66～69:67%), LAD(HR≤60:100%, HR61～65:75%, HR66～69:75%, HR≥70:100%), LCX(HR≤60:63%, HR61～65:67%, HR≥70:80%)。【結論】冠動脈3枝の比較ではLCXがRCAとLADと比較して陽性的中率が低かった。その理由はLCXの屈曲が他の2枝と比較して屈曲が大きいため過大評価しやすい傾向にあることが原因であると考える